

日本と日本人，再生の条件

坂田三允（長野県看護大学）

ノストラダムスの予言は当たらなかったけれど、今の日本、とても暮らしにくい。環境汚染、地球温暖化などという世界規模での問題は別格として、今日明日の生活に困るというほどではないにしても、上向きとかいう専門家の発表をとて信じる気にはならない経済状態、高い失業率と平均寿命にまで影響を及ぼすほどに多発している中高年者の自殺、相次ぐ少年たちの犯罪など、これからの日本の行く末を危惧せざるを得ない。けれども、それでは一体私はこの現状に何ができるのかと考え、それはあまりにも漠然としていてとらえどころがなく、立ちすくんでしまう。

いつもそんなことを考えているわけではないのだが、大学がある駒ヶ根行のバスを待っている間の暇つぶしにぶらっと入った書店で見つけたのがこの本である。本書は、日本総合研究所が1999年2月に開催した「二十一世紀の知のパラダイム—こころの生態系を見つめて」というシンポジウムでの討議と、それをもとに行なわれた田坂氏と河合、小林、中沢の各氏との対談を収録したものである。帯封には「大転換期を果敢にのりきる着想を提唱!! まだまだ、人のこころに生きる力をかきたてるものがある! “こころのよりどころ”を示す!!」とあり、もしかしたら、私の捜し物が見つかるかもしれないと思って手にしたのだった。

本書にはときに刺激的な、また、ときにはずっしりと体に染みわたってくる言葉が数多くちりばめられている。たとえば河合は二十世紀を特徴づけた言葉はオペレーション、すなわち操

作であったとし、現代をエロス欠乏症とした上で、「対策というのは、する側は楽しいかもしれないけど、される側はあまり楽しくはないものです」だからその対極に「何もしないことに全力をあげる」ことの必要性を説く。また、中沢はロゴス中心主義的な思想形態の限界をいかに乗り越えるかが二十一世紀のテーマであるとして、「非知」によって立つ「他力系」という存在の仕方を提唱する。そして小林は「こころとは非常に不思議なもので、（中略）そういう不思議さを自分で見つめるために、非知とか無為とかが必要になるのではないのでしょうか」と述べ、さらにまた、「意識というのは、必ずある対象に働きかけようとし、非常な集中力を持って相手に対して働きかけようとするんだけど、そのことによって、往々にして自分のこころが持っている潜在的な、とてつもない広い裾野というのが、まったく見失われてしまうような気がする」とも言っている。

読み終えて、私は再び立ちすくんでいる。著者らの言葉が重い。著者らも指摘しているけれど、私など、他力という思想は、すぐに「怠惰に何もしないという発想にすりかわってしまう」であろうし、「何もしないことに全精力を尽くさずに、何もしない」ことになってしまいそうだ。けれども、いつまでも「難しい問題に直面すると、すぐに割り切りたくなる」魂の弱さを抱えているわけにもいかない。二十一世紀は「非知」「他力」「弱さ」といったものとあらためて向き合ってみたいと思う。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694